

俳句日記 2010-2012

池窪弘務

奈良に住みだしてから四十余年。毎年梅は律義
に咲いてくれる

子に送る今年の梅の写真メール



2010年

四国遍路とともに鴻風俳句教室での俳句修行も始まった。「一日一句三ヶ月続けなさい」。それが地獄の始まりだった。

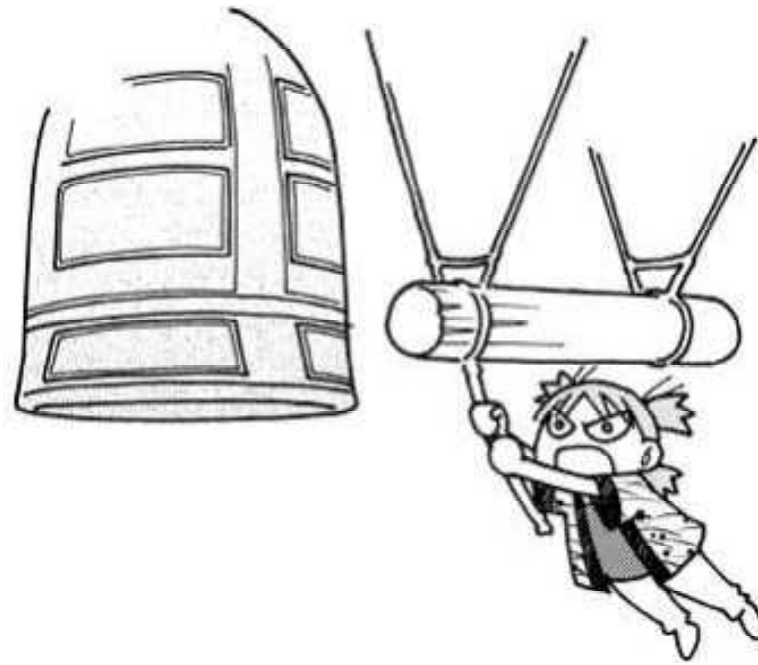


四国遍路 十月

生きろいっ 一步が嬉し秋遍路

遍路道薄明かりに咲く萩の花

妻の突く梵鐘の音秋の空



十月

秋深し病も老いも夫婦かな秋

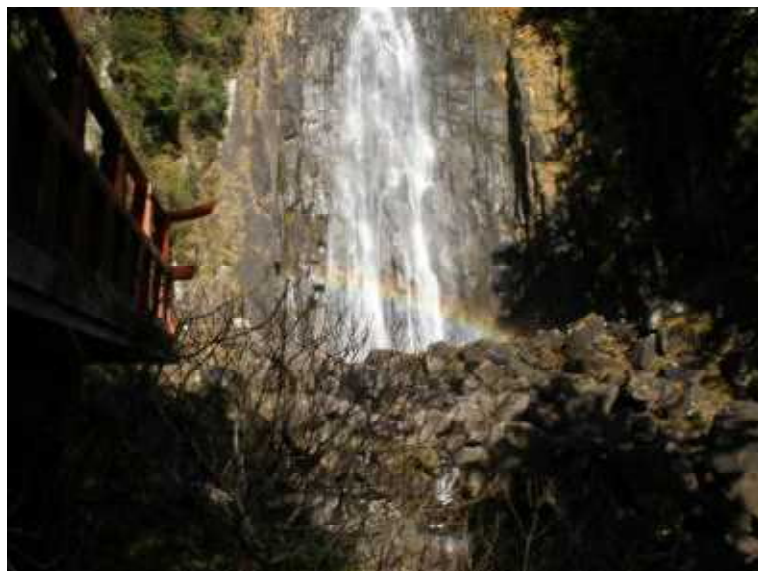
妻と南紀の旅をした。小説も一つ出来た。思いで
深い旅だった。

南紀行 十二月

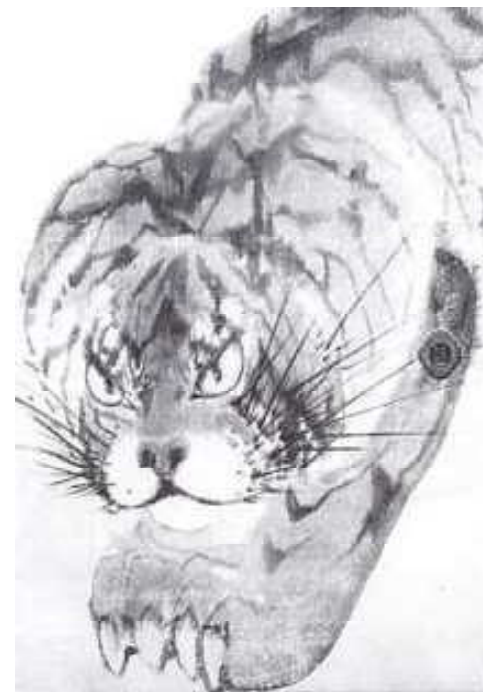
大門坂夫婦杉より冬台道



寒き手を自ずと合はす那智の滝



冬うらら無量寺の龍虎に会いに行く冬



冬日暮れ佛とかり〜橋杭岩



紀伊大島

椿咲くまある地球の水平線

十二月

今朝も打つインスリン注射の針寒し

冬の夜妻と娘の長電話冬

寄せ鍋をつく夫婦といふ単位

2011年

二月

水仙にほほえみかける石仏 奈良・般若寺

教育入院

低血糖で救急車で運ばれる。もう一度教育入院
しないさいと言うことで。入院中は俳句一句のみ。

季節なき病窓に降る牡丹雪

三月



春浅し御仏守る十二神春 新薬師寺

火の粉舞ふ漆黒の宇宙（そら）二月堂 修二会

奈良坂は京の春つと続く道 奈良坂（般若寺）

義姉の墓一輪挿せり桃の花

春風がシャッター街を通り抜け

春風に鳳凰羽ばたく平等院春 宇治平等院

菜の花や今は昔の通勤路春

五月

高野山に父母の影追ふ薄暑かな 高野山

山深き天空に咲く桐の花 高野山からの帰路

車窓から

六月

短夜に行き先のない列車待つ

紫陽花に初めぐの色浮かびをり

梅雨晴れや六十半ばの初舞台 妻の詩吟の癸

表会

七月

七夕や星なき空に雲の船

ご褒美に糖質0のビール飲む

九月

フェルメール秋の京都に舞ひ降りる 京都市美術

館「フェルメールからのラブレター展」

十月

鹿の目に運慶見ゆる北円堂 興福寺

コスモスを一輪供ふ辻地蔵

鳥居抜けまた鳥居抜け深む秋 三輪神社

十一月

秋探し深夜に停まる救急車

十二月

冬の蚊を打たずに空に遊ばせり

影一つ枯れ木に止まる鳥かな

冬の田に朝日を受けて鷺立てり

月消ゆる冬の宴を孫と見る 皆既月食

柚子浮かべ子供に帰る湯舟かな 冬至

2012年

瀬戸内海の塩飽列島の広島。妻の父の古里の島である。



一月

元日や家族葬とて案内な

凍る朝神戸の地震（なゑ）が蘇る

二月

友見舞ふ通勤の道風寒し 厚生年金病院に辻

本君を見舞う。

冬の雨幼き日々の忘れ物

三月

早春の風になりたき子供たち

逃り来る春と老いとの鬼ごっこ

住む人の絶えに（庭の椿咲く

人の世はあつと言ふ間の彼岸かな 神呪寺・納骨

堂にて

春の日や腹帯いただく帯解寺

老い呆けて土筆誰の子忘れけり

四月

丸亀・広島

春風の漕ぐぶらんこや過疎の島

過疎の島崩れ（壁に春の雨

春の海波の音だけ繰り返す

ゆつたりと時が流れる春の島

野仏を巡る小島の春巡礼

雛守る鳥の威嚇や春の道

風光る大和三山芽吹きかな

五月

風薫る鎮守の森に老婆消ゆ

トワイライト北海道旅行

夕暮れの窓に流るる穂麦かな

北の地で出会ひ(桜五月尽

何かるる水紋上がる植田かな

一日をかくありた(と日日草

紫陽花に薄ら日の差し雨上がる

七月

雷神の住処あふく雲の峰

縁側で西瓜の種を孫と吹く月

禁断のアイスを舌に転がして 糖尿病の私

八月

原爆忌誰が罪ぞと思ひをり 08月07日

九月

団塊のどつとひめく敬老の日

孫の手にいつの間にか猫じゃらし

十月

節電に解き放たれて秋の風

鶉は小首か(げて何思ふ

振り向けば梵鐘浮かぶ秋の空

稲穂波少女の自転車駆け抜けり

曼珠沙華父のおはくを口づさむ

秋日射す補嚴寺の門に世阿弥舞ふ 補嚴寺

真つ白な雲に乗りた(秋の空

秋風や石碑一つの城の跡 十市城跡

秋深し阿修羅見つめる浄土かな 興福寺

我もまた勲章欲しき文化の日

十一月

興福寺北円堂

さあ一步世親の足に冬日さす

そつと出す無着の足に冬日さす

冬日漏れ運慶見ゆる北円堂

明日香七五三

石段を踊り歩くよ七五三 春日大社

今日こそは私の天下七五三

冬の夜母の句集をさがしけり

十二月

レオポンの淋しき瞳冬の月冬

アインシュタイン空間曲がる冬の空

月凍る大気の底は静まれり

冬うらら選ぶ人なき選挙かな

クリスマス妻と二人の忘年会

レオポンは雄のヒョウ（レオパード）と雌のライオンとの種間雑種。1959年（昭和34）、日本ではじめて生まれました。あの頃はヒーローでした。胸を躍らせて阪神パークに見に行きました。豹の後敏性とライオンの強さをかね持った野生の王者。それに科学の夢がプラスされていました。やがて、倫理的な問題を提起され、忘れられていきました。自然界には存在しない彼らが一代限りだったのも哀れです。最もやんちゃだったジョニ

ーは神戸にいました。最後の八年は一頭で過ごしました。そして、二十四才で死にました。今は、剥製になり神戸の「りぞ鳴尾浜」でひっそりと公開されているそうです。義母の家の近くです。見たいと思います。写真のジョニーは何を見ているのでしょうか。いるはずもない獲物や敵を睨んでいます。でも、瞳には怒りも、欲望もありません。透き通った諦観とプライドがあるだけです。胸がいつぱいになりました。この細胞がそんなことにならないように祈りたい気持です。

レオポンの淋しき瞳冬の月